

<奨励賞 5団体>

- 特定非営利活動法人 オルタナティブビレッジ (兵庫) / 20万円  
「里を育みながら人を育む里育プログラム」

<p>団体概要</p>	<p>当団体は、既存の学校教育や行き詰った社会に疑問を感じる30代の子育て世代が集い、持続可能なコミュニティ創りを基盤としながら、環境活動や自然体験などの教育活動、食や農に関わる事業を通して、地域間のネットワークづくり、循環型社会の形成や環境保全に寄与することを目的に、2010年にNPO法人を設立。</p> <p>三木市の空き家(ムラノマ)、神戸市の田んぼ付きのシェアハウス、古民家「サトノマ」を拠点に、環境教育、農業・自然体験によるスクール事業、情報発信・啓発事業、ニート・保護者へのカウンセリング事業、エコビレッジやコミュニティづくりのコンサルタント事業を展開している。</p>
<p>事業概要</p>	<p>無縁社会や核家族化、シングルマザーの増加などによるコミュニティの希薄化が、母親の子育てに負荷をかけている。本事業は、自然豊かな里山や古民家を交流拠点とすることで、老若男女が関わることのできる緩やかな子育てコミュニティづくりに取り組む内容。</p> <p>具体的には、①神戸の都心から約30分(淡河町)の古民家を活用した、都市の親子を対象とした農業・里山体験(月1回)、②働いているママを対象とした「食と職×子育て」をテーマとしたワーキング(シェアオフィス)や里山サロン、③不登校生などを受け入れるカウンセリングや農業体験などを導入しながらの里山セラピー、地域の祭りイベントなどを実施し、年間延べ1,000名の参加者を見込む。</p>
<p>講評</p>	<p>コミュニティの希薄化に象徴される現代の社会課題を反映した都市部において、厳しい子育て事情を持つ親子に対する農業・里山体験などを通し、地域の住民や団体とも連携しながら世代間交流・都市農村交流を行う本事業の「社会性」と「効果・発展性」を評価した。また、地域の祭りやイベントへの参加を通して、地域住民や地域団体とも連携して幅広い協力関係を築いていき、今後、移住希望者の受け入れを視野に入れるなど、少子化が進む淡河町の地域にとっても高い共感を得られる事業であると言える。</p> <p>子育てに自然や農を取り入れるこのような事業が、本アワードからの助成によって、地域での存在感を高め、さらなるプログラムの充実と深化を期待したい。</p>

■特定非営利活動法人 子どもデザイン教室（大阪）／20万円

「子どもデザイン教室」

<p>団体概要</p>	<p>児童養護施設の子どもたちが、自由な雰囲気の中で遊びながら、図画工作やコンピューターの技能、デザインを学ぶことは、自らの将来を企画設計（デザイン）する力を養い、自立できる力を付けられるのではと考え、2007年にNPO法人子どもデザイン教室を開設した。</p> <p>現在、週5回、デザイン教室を開催。1回につき5～6名の子どもが参加している（一般の子どもと児童養護施設の子どもの割合は半々）。</p>
<p>事業概要</p>	<p>本事業は、児童養護施設の子どもたちが「デザイン教室」で造形活動をすることにより、自由に想像する力や諦めずに努力する心を育て、自己肯定感を育み、更にコンピューター技能を学ぶことで、卒所後の自立を幼少期から計画的に準備することを目的としている。また、一般の子どもの少人数での交流は、互いに多様性を理解しあい、心の居場所づくりにつなげることを狙いとしている。</p> <p>具体的には、①自分のキャラクターをデザインしよう（客観的に見つめる力と自己肯定感を高める）、②陶器粘土でピンバッジを作ろう（ものづくりの達成感と愛着あるものづくり）、③お菓子と菓子袋をデザインしよう（誰かに食べてもらうことを意識し、思いやりの心と創意工夫を学ぶ）、を実施する。</p>
<p>講評</p>	<p>当団体は、児童養護施設の子どもたちの健やかな育ちと自立の手助けをするだけでなく、一般向けの定期的な説明会を行うことで、親と暮らせない子どもたちの問題を知ってもらう機会をつくり、社会全体の問題として意識してもらうことに取り組んでいる。そうした「社会性」に加え、厳しい環境の中にいる子どもたちの自立を育む事業の「先進性」や「創意工夫」が高く評価された。</p> <p>本アワードの助成が、児童養護施設の子どもたちの自立をより促進し、社会の中にある課題について一般市民の理解がより高まることにつながってほしいと期待している。</p>

■ 特定非営利活動法人 さんまクラブ（滋賀）／20万円  
「土曜さんまクラブ」

<p>団体概要</p>	<p>甲賀市の若者3名が読書会の中で現代社会の“生きづらさ”を学習する中で、大人や子供の社会から「居場所」（さんま＝時間・空間・仲間）が奪われていることに気づき、子育て支援事業を中心に、地域にその「居場所」を創造、提供するため、当団体を2013年に設立。インクルーシブ（内包的）社会の実現への寄与を目的としている。</p> <p>具体的には、①地域の小学生への遊び場提供事業（土曜さんまクラブ）、②放課後の居場所提供事業（放課後さんまクラブ）、③広島・岩国への平和スタディツアー、などを実施している。</p>
<p>事業概要</p>	<p>本事業は、思いきり身体を使って遊べる「空間」、のびのびとやりたいことに取り組む「時間」、共に考え・遊び・学びあう「仲間」の3つの間を提供するといった、これまで実施してきた「土曜さんまクラブ」をより充実させ、平均参加人数を20名から25名をめざしている。</p> <p>具体的には、小学1～6年生まで幅広く対象とし、ものづくりや科学実験、料理などのプログラムを提供し、「なぜそうなるの？」を一緒に考えることを重視する。</p>
<p>講評</p>	<p>本事業は、現代社会において奪われている「3つの間」の創造・提供によりインクルーシブな社会の実現をめざすという、コンセプトの独自性と、若者が中心となって事業を展開してきていることが高く評価された。</p> <p>本アワードの助成によって、教材・書籍の充実が図られ、スタッフのスキルアップにより、プログラムの内容がさらに充実し、地域の多くの子どもたちが「考える力」を育み、生き生きと遊び・学習できる「3つの間」となることを期待したい。</p>

■特定非営利活動法人 保育ネットワーク・ミルク（兵庫）／20万円

「親子でつくる、親子でつなぐ、みんなの居場所 ～ミルサポひろば～」

<p>団体概要</p>	<p>1992年、三田市のニュータウン開発による人口急増の中、子育て支援のニーズが高まる中、保育士や幼稚園教諭の資格を持った11名が中心となり、当団体を設立。「母乳にはなれないけれど、頼りになる粉ミルク」をコンセプトに活動を行っている。</p> <p>2001年にはNPO法人の認証を受け、預かり保育や出張保育、子育てに関するセミナー、親子交流会、コンサートの運営などを実施。2016年4月からは小規模保育施設の開園を予定している。</p>
<p>事業概要</p>	<p>本事業は、子育て講話や親子交流会の中で、「子育て中でもできること、やりたいことをミルクと共に！」「お互い様の関係を形に！」と2013年2月から始まった。今回で第3期となり、当団体の保育ルームを中心に「ミルサポ広場」（親子で楽しむ環境づくり）を内容とする。第1期・第2期のメンバーが中心となってプログラムを企画し、ミルクスタッフ（保育士）が協力する。</p> <p>具体的には、①親子あそび、②ママ講座、③一時保育体験、④鑑賞会（日本舞踏など）を実施する。</p>
<p>講評</p>	<p>本事業の特徴は、当事者の母親が企画することで、母親自身が自信を持ち、子育て中の今だからこそできる楽しみを実感する効果や、家庭以外で支援される母親同士の出会いと広がり、社会とのつながりを意識するところにある。すでに2期の実績があり、「実現性」と「継続性」、「効果と発展性」が高く評価された。</p> <p>多様化する子育てにおいて、必要とされる支援も多様化している。その多様化しているニーズに、母親自身が向き合い課題解決に向けて交流や学びの企画を作っていくといった取り組みが、本助成を通して活動がさらに広がり、発展することを期待したい。</p>

■特定非営利活動法人 やんちゃまファミリー with (大阪) / 20万円

「地域全体で～子どもの孤独・貧困問題を救う居場所づくりプロジェクト」

<p>団体概要</p>	<p>当団体は、虐待を受けている子どもの事件をきっかけに「孤立しないで皆で子育てしよう。一緒に考えよう」と、松原市を中心に1992年、子育てサークルを設立。その後、子育て・親育ちの支援、地域住民の助け合い、人とのつながりが生まれる“場”を提供し、子どもたちが安心・安全の地域づくりを目的とするNPO法人を2007年に設立した。</p> <p>主に、虐待防止のための関係づくりを目的とした子育てサークル支援、自殺予防対策の為に相談窓口、起業のための運営相談、お母さんが講座等参加のための出張保育、認知症・障がい者の居場所づくり、子どもの居場所としての「子どもごはん」などの事業を実施している。</p>
<p>事業概要</p>	<p>本事業は、孤食や孤立する子ども、生活困窮者の親子、社会的・心理的・経済的に弱者である子どもを支援する「居場所」づくりを行う事業である。</p> <p>具体的には、月1回、「子ども食堂」を開催し（夏休みは3回）、1時間は夕食、その後は団らん（遊びと宿題）とし、利用者は10名を予定している。運営は、行政や社会福祉団体、ボランティア、地域の方々が一緒に取り組み、子どもを取り巻く環境、その背景にある問題等を真剣に考えていく。また、先進的な「子ども食堂」のスタッフを講師として招くなど、研修の実施も予定している。</p> <p>さらには、今後、松原市のモデル事業として継続できるよう、「子どもの居場所」づくりの輪を広げ、市内各地で展開していきたいとしている。</p>
<p>講評</p>	<p>2015年12月に「子ども食堂」をプレオープンすることで、ボランティア等の人的な体制や場所の確保を行うなど、実施にあたっての継続性・実現性が確認された、種々の課題整理を行っての事業計画であり、事業の継続性・実現性も織り込まれたものになっている。審査委員会では、課題の解決に向けた「社会性」「効果と発展性」が高く評価された。</p> <p>本アワードの助成をきっかけに、「子ども食堂」の運営における地域のさまざまな団体との連携が一層充実し、そのことが市内各地域への展開や、次なる担い手の創造につながることに期待したい。</p>